

特集

協同の力を生かした 「子育て」の支え方

2017 年、中央公論新社が主催する「新書大賞」において、吉川洋氏の『人口と日本経済』が第 2 位となった。人口減少という切り口から、日本の経済成長を考える同書が大きな話題を呼んだことも示すように、人口減少は 10 年以上にわたって語られてきた中長期的なテーマである。

この人口減少という問題を考える上で、少子化や子育てという論点を避けて通ることはできない。事実、少子化を解決するための子育て支援は、昨今話題の「異次元の少子化対策」以前から進められてきた。それにもかかわらず、マスメディアや SNS 上において、子育ての困難を訴える声は、今もあがり続けている。

今、本当に求められている支援とはどのようなものだろうか。また、協同組合は子育てにいかに関与できるのか。こうした問題意識から、本特集は「協同の力を生かした『子育て』の支え方」と題して、協同組合による様々な形の子育て支援のあり方に注目した。

特集の 1 つ目は、生協の独自商品による子育て支援という視点から、日本生協連が展開する「きらきらステップ」「きらきらキッズ」を取り上げた。

また、生協の宅配事業を活かすコープしがと自治体の協同による「おむつ宅配便」にも着目した。

さらに、子育て支援においては親の働き方という視点も重要となる。職場における生協の子育て支援の実態については、大阪いずみ市民生協への取材から紹介することとした。

そして、最後の一つとして、生活を支える共済事業に注目し、コープ共済連への取材を通じて、子育てという視点から共済の役割を検討することとした。

生協の歴史を振り返ってみても、「子育て」に貢献することは、組合員の生協に対する期待のなかでも、とくに大きなものであった。本特集が、生協そして協同組合「らしい」子育て支援のあり方を考えるきっかけとなることを期待したい。

(本誌編集長 加賀美太記)